

「新ポケット英和辞典」「岩波英和辞典新版」

325

たい。いささかあら探しの感があったかもしれないが、評者の真意は、この書によって学界にデビューした著者が本書にしばしば見出される uncritical な言説を再検討し、本書をさらに完全なものにして戴きたいのである。筆者は著者の野心

的な意図と努力とに対して敬意を払う点では人後に落ちないものであるが、本書をもって「名著」とするような(原沢正喜氏「英語青年」1958年2月)、あまりにも儀礼的な書評にくみすることはできないのである。——木原研三

岩崎民平編「新ポケット英和辞典」

研究社 昭和 32 年 ¥600

島村盛助・土居光知・田中菊雄共著「岩波英和辞典新版」

岩波書店 昭和 33 年 ¥720

戦中の空白をうずめるためにも、また戦後のアメリカ英語の急激な進出に対応するためにも、さらにまた当用漢字・現代かな使いという国内的な言語政策に対処するためにも、わが国の英和辞典は最近いずれも改訂の必要に迫られるか、新規な編集が要求されることになった。例にもれず、英語辞書界も戦後 10 年間は多難の道を歩まされたものと言えよう。

「ポケット英和」は戦後版(初版昭和 26 年)で、一度増補されて後「新ポケット英和」となったもので、この点最も新しい辞典の一つである。これに対して「岩波英和」(初版 1936 年、新增訂版 1951 年)は 20 年余りも特異の地位を占めてきた由緒ある辞典である。この新版と新ポケットとは大きさないし分量からみても、学習者の立ち場を大いに考慮している点からみても共通したものがあるが、本質的には大きな相違がある。この相違は一方が「編」で他方が「著」であるところからも、簡便調法を暗示するポケットのあるなしによっても、おぼろげ

ながら推察がつく。

岩波英和は、「根本の語義をなおざりにして末端の意味を数限りなく学習しても、生命ある英語は決して正しく習得されうるものではない」という固い信念のもとに、収録語約 49,800(新版では 60,000)のうち、約 2,800(新版では 2,900)の基本語を選び、これらには「まず適当な解釈(Interpretation)を与え、然る後語義の展開を説明しよう」と試み、「*New English Dictionary*」を唯一の羅針とし、海図として各語の意義の変遷を研究してその順序にこれを記載して出来上ったもので、この縮約 NED 日本版はわが国の英語辞書史においては特筆されるべきものであった。その歴史的(Historical)な方針と字典主義的な方法はこの辞典の基調となって新版でも受け継がれている(もっとも時勢の推移で人名や地名などの固有名詞や、アメリカ英語が適度に加えられるはしている)。これに対してポケット英和は「事典的な欠点をできるだけ補う」とともに、「英米の慣用を公平に扱

うことによって従来のイギリス偏重の行き方を排し、包括的な立ち場に立って可能な限り多くを採り入れるという純粋に記述的な (Descriptive) 方針をとっている。その結果「世界でユニークな辞典」が生まれ出たわけであるが、一見誇張とみえるこの辞書自賛も考えてみれば決して誇張ではない。およそ外国語としての英語の辞書(とばかりは限るまい)が、大小いく種類もこれほどたくさん出版されている国は日本以外にはなかろうし、その日本でユニークな辞書であればすなわち世界でユニークという論が成り立つからである。ともかく学習のためということを第一目標とした両辞典ではありながら、その編集方針や重心の置きどころによって本質的にはかなり大きく相違していることは確かである。ポケットの網羅的などころ——というところのポケットには合財袋的な機能もある——にはむしろ実用的価値も大いに見出せそうである。事実、等量という感じを受ける両辞典ではあるが、試みに計算してみた結果、岩波版にしてポケットは220余ページ増しとなっている。このスペースは1万余りの語彙の増加その他を意味するものであろう。

辞書の有用性ということとは引きやすさということにも関連するが、この引きやすさということは語義の配列とも大いに関係がある。求める語義が手っ取りばやく見出しやすいのはアメリカの辞典であろう。一般に、最も普通な語義を最初に掲げ、次第に余り使われない特殊な語義に移るといった配列法をとっているからである。しかしこの方法はある語の語義を発展分岐的にとらえようとする場合には

何の役にも立たない。岩波英和は *NED* に準拠して歴史的発展の跡をたどっている結果、方針は固定しているようであるが、学習と実用をめざすポケット(その他一般の英和辞典)ではどういう方針で行われているものであろうか。場合場合によって都合よく順序だてるといのが慣用的な方法かも知れない。なおまた一貫しているようで一貫していないのは歴史的方法である。例えば岩波の *note n* は (a) しるし ① 音符; (《転じて》) 音調; (器楽または声学の) ある高さの音; [詩歌の一ふし; 鳥の歌、鳥の叫び; 談話などの調子...] ⑥ 支払の約束書; 紙幣; 約束手形. ⑦ (《転義》) 名声。(b) 注目 (= notice). という形に語義が分類されているが、このうち ⑦ の「名声」は基本語義の「しるし」から一挙に転義となって現われているように記述されている。これはしかし、多分 ① の「(それぞれの特徴をもった) 鳥の叫び声」から「特徴」となり、再転して「名声」となったものであろう。このように語義の分岐が放射的であるか連鎖的であるかという問題は、単に語義の歴史的変遷のあとをたどるだけでは解決できない場合が多い。ここに語義論的立場に立った第三の分類法(例えば Wyld が *UED* で試みているような)が必要となる(ポケットの *tongue* 参照)。しかしいずれの立場をとるにしても、岩波が示しているような基本語義 (Primary sense) の設定は、基本語の指示とともに、学習辞典としては重要なことであろう。なおそれに劣らぬ重要さをもつものは、主要語義 (Predominant sense) の明示であろう。これは生きた英語を学習する上に有力な指針となるから

である。これには Michael West などが発表している Semantic count の結果など大いに参考にされるべき資料と思われる。

話は少し脇道へそれてしまったが、両辞典はそれぞれ特色を異にした新しい学習辞典の典型として今後長く愛用されるであろうし、ある場合には互に相補い合うという相互扶助の美德を発揮することもある。例えば一方語の根本的意味の理解を助けるための語原(または原義)の説明が欠けている代りに、他方 usage note や発音上の指示(例えば as far as he [hi:] is concerned) がそれをつくっているというぐあいに。

最後に二三気づいた誤(植)と思われる点を記して、食べずにおいてプディングを批評するといった無礼の盲言に対し

おゆるしを願うことにしたい。

《ポケット》After a storm (comes) a calm. 《諺》雨降って地固まる / rare 4 《米》... 生焼けの... (は別語扱い) / with one's heart and soul // take [answer for] the consequence / give a person an audience to hear / off [of] plumb / smell of the baby... (childish).

《岩波》in consideration of その報いに / not... by a long shot とてつもなく当てがはずれて / I make my own imported cigars. 私共で製造する葉巻は輸入品です (s.v. Irish) // in one's shirtsleeve / gall [tread] on one's kibes / Richard III の Gibber... / ship of the desert [動] らくだ。

—乾 亮—

石田憲次著 「エマーソンとアメリカのネオヒューマニズム」 (新英米文学語学講座)

研究社 昭和 33 年 ¥250

この書物は著者が多年研究を続けてきたアメリカの四人の思想家 Emerson, W. C. Brownell, Irving Babbitt, P. E. More を取上げ、それぞれの思想の特質を歴史的社会的背景、本人の教養と性格などいろいろな角度から検討し、それら思想家がたがいに相補いつつ指向しているものが今日のアメリカにとって何を意味するかを説いたものである。それは単にアメリカに限らず、広く原水爆の脅威の下で信仰も信義もなく、闘争することしか知らない世相を憂えて、「われら如何に生くべきか」という問題に「新しい

光」を投げようとするものであって、「現代」を救おうとする著者の祈りが動機となっている。世紀の大問題と取り組む碩学の蘊蓄を傾けての労作であって、さすがに豊かな知識、叡智、暗示に富む興味深い本である。筆者はずいぶんいろいろなことを教えられた。単に英米文学専攻の人だけでなく、広く現代の悩みをわかち人々に推奨したい本である。

もし本書に何か物足りないことがあるとするなら、次のような点であろうか。まず Emerson の根本思想の検討がもっと望ましい。彼を、万物の根元、神、あ